

弘法大師和讃

こうぼうだいしわさん

帰命頂礼遍照尊
宝亀五年の六月に

玉藻よるちよう讃岐瀉
屏風が浦に誕生し

御歳七つの其時に
衆生の為に身を捨て

五の岳に立雲の
立る誓ぞ頼もしき

遂に乃ち延暦の
末の年なる五月より

藤原姓の賀能等と
遣唐船にのりを得て

しるしを残す一本の
松の光を世に広く

弘め給える宗旨をば
真言宗とぞ名づけたる

弘め給える宗旨をば
真言宗とぞ名づけたる

真言宗旨の安心は
人みなすべて隔てなく

凡聖不二と定まれど
煩惱も深き身のゆえに

ひたすら大師の宝号を
行住坐臥に唱うれば

加持の功力も顕らかに
仏の徳を現ずべし

不転肉身成仏の
身は有明の苔の下

誓は竜華の開くまで
忍土を照す遍照尊

仰げばいよいよ高野山
流れも清き玉川や

むすぶ縁しの蔦かずら
継りて登る嬉しさよ

昔し国中大早魃
野山の草木皆枯ぬ

其時大師勅を受け

神泉苑に雨請し

甘露の雨を降しては

五穀の種を結ばしめ

国の患を除きたる

功は今にかくれなし

吾日本の人民に

文化の花を咲せんと

金口の真説四句の偈を

国字に作る短歌

いろはにほへどちりぬるを

わがよたれぞつねならむ

うぬのおくやまけふこえて

あさきゆめみじゑひもせず

まなび初めにし稚子も

習うに易き筆の跡

されども総持の文字なれば

知れば知るほど意味深し

僅わずかに四し十七じゅうしち字じにて

百ひやく事じを通つうずる便べん利りをも

思おもえば万ばん国こく天あめの下した

御ご恩おんを受けうげざる人ひともなし

猶なおも誓ちかひの其その中なかに

五ご穀こく豊ほう熟じゆく富とみみ貴とうとき

家か運うん長ちよう久きゆう智ち慧え愛あい敬きよう

息そく災さい延えん命めい且かつ易い産さん

あゆむに遠とほき山やま河かわも

同どう行ぎよう二に人にんの御ご誓せい願がん

八はち十じゆう八はちの遺ゆい跡せきに

よせて利り益やくを成なし給たまう

罪ざい障しょう深ふかきわれわれは

繫つながぬ沖おきの捨すて小お船ぶね

生しょう死じの苦く海かい果はてもなく

誰たれを便たよりの綱つな手で繩なわ

ここに三さん地じの菩ぼ薩さつあり

弘ぐ誓ぜいの船ふねに櫓ろ權かい取とり

たすけ給たまえる御おん慈悲じひの

不ふ思し議ぎは世よ世よに新あらたなり

南な無む大だい師し遍へん照じょう尊そん

南な無む大だい師し遍へん照じょう尊そん

南な無む大だい師し遍へん照じょう尊そん